

# 日本社会心理学会会報

236号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会（担当常任理事：内田由紀子）

2025年12月1日

## 日本社会心理学会第66回大会 開催報告

唐沢 かおり

2025年9月20日（土）、21日（日）の二日間にわたり、日本社会心理学会第66回大会を、東京大学文学部（本郷キャンパス）にて開催いたしました。参加者数718名（予約参加471名・当日参加247名）と、大変多くの方々にご参加いただき、感謝申し上げます。

当日は、心配していた台風などによる交通機関の乱れもなく、無事、皆様にお集まりいただくことができました。予約参加者のみならず、当日参加の方も多かったことや、例年に比して、多くのワークショップの申し込みをいただいたこともあり、非常に盛り上がった大会であったと感謝しております。シンポジウム、招待講演のいずれにおいても、用意した2つの会場がほぼ満席で、刺激的な議論をお楽しみいただけたと思います。また、文学部は、各教室があまり大きくななく、口頭発表やワークショップでは、一部の教室で廊下にまで立ち見が出て、ご不自由をおかけいたしましたが、それもまた「活気のあった大会」の一こまとして、お許しいただければ幸いです。

さて、今年度の大会も、昨年度と同様、プロフェッショナル・コンгрレス・オーガナイザー（PCO）の支援をいただきました。開催主体となった東大の社会心理学研究室は、それなりの学生数を抱えていますので、当日の実務を担う人員確保については、なんとかなる状況でしたが、学会開催では、それ以前の準備や会場設営の負担が大きいのも事実です。PCOから、当日の運営のみならず、これらの部分に関するサポートを得たことで、大会開催という役目を乗り切ることができたと実感しております。常任理事会が大会開催校決定に苦労する状況が長らく続いていますが、昨年度、岡先生が聞いてくださったPCOによる支援という道に今年度の経験を重ねることで、安定的な大会開催につなげることができればと願っています。

改めまして、大会にご参加いただきました皆様、開催に際してご支援いただいた多くの皆様に感謝申し上げます。

（からさわ かおり・東京大学・日本社会心理学会第66回大会準備委員長）

## 大会参加記

### 対面参加はやはり楽しい

井上 裕香子

本年度9月20日・21日に、東京大学本郷キャンパスにて日本社会心理学会第66回大会が開催されました。昨年度の大会は迷走台風の影響で直前にオンライン開催へと変更されたため、今年は2年ぶりの対面開催となりました。私自身は2023年の大会に参加できなかったため、実に3年ぶりの対面参加、そして対面での口頭発表は2019年以来（！）となりました。

当日朝、受付を済ませて会場に入ったときに、「ああ、そういえば対面開催の学会ってこんな感じだったな」と思い出しました。初日の最初にポスター会場に入っただけで、たくさんの参加者と発表者があちらこちらで議論を交わしているのが目に入り、部屋で一人パソコンに向かっているだけでは



味わえない“学会の空気感”を肌で感じました。また、学会や研究会で年に1度お会いするかどうかという関係性の方を会場でお見掛けして、お元気そうだなと思ったり、メールなどでやり取りしていてもしばらく直接は会えていなかった方と雑談したりと、対面学会ならではの再会の喜びもありました。この3年間、他の学会には参加していたのですが、日本社会心理学会はそれの中でも特に規模が大きいため、会場の熱気もひとしおでした。

今年度は、主発表者として口頭発表を1件、共著者としてポスター発表を1件行いました。口頭発表では、発表後の質疑にとどまらず、翌日の雑談の中でも有意義なコメントをいただきました。ポスター発表では、修士・博士課程の若手の方からベテランの先生方まで幅広い方々にお越しいただき、様々な分野・視点からコメントを頂戴しました。オンライン開催では、見たい発表を自ら能動的に探索しなければならないため、どうしてもタイトルから関心を持った発表を中心見ることになります。しかし、対面学会では「事前に全く気に留めていなかったが、なんとなく立ち寄ったセッションやポスターで思いがけず面白い発表に出会う」ということがしばしばあり、発表者としても聴講者としても、そのありがたみを改めて実感しました。

今年度はセッションも大変充実しており、ワークショップは12件と、ここ数年では例を見ないほどの多さでした。そのため、参加したいワークショップが重なってしまい、嬉しい悲鳴を上げながら取捨選択をしていました（プログラムを編成された方々もきっと悩まれたことと思います）。特に、兵庫県知事選や社会の分断、AIなど、近年の社会問題を社会心理学の視点からとらえようとするワークショップが多く、変化の大きい時代において心理学が果たせる役割について考えるきっかけにもなりました。私が参加した「日本の分断は変化しているのか？」というワークショップは、分断の拡大が叫ばれる日本で実際のところ何が起きているのかを調査データから検討していくセッションでしたが、非常に興味深い貴重なデータを色々と公開いただき、大変ためになりました。

最後になりましたが、本大会の準備・運営に尽力された先生方、スタッフの皆様に心より感謝申し上げます。2日間、久しぶりの対面学会を存分に楽しませていただきました。大変お疲れさまでした。

(いのうえ ゆかこ・安田女子大学)

## 文化心理学のセッションに参加して

奥山 智天

昨年は台風の影響によりオンライン開催となったため、今大会は2年ぶりの対面開催となりました。新型コロナウイルスによる制限が完全に解除された状態での対面開催という意味では、実に6年ぶりでした。本大会の開催にあたり、大会の準備および運営にご尽力いただきました関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。さて、2日間の学会を通して私が感じたことは、「やはり対面での学会はいいな」ということです。口頭発表のセッション後に発表者のもとに質問を行ったり、休憩室でたまたま見つけた知り合いの先生にご挨拶をしたりと、インフォーマルな形での交流の機会がたくさんあることは、対面開催の大きな魅力だと思います。また、社会心理学会が若手に対して非常に開かれた学会であることも改めて実感しました。（私の体感ですが）多くの若手研究者が本大会に参加して発表しており、中には、ワークショップの話題提供者として登壇されている方もいらっしゃいました。このように、若手研究者にも発表の機会が多分に用意されていることは、大学院生の一人として大変有難いことです。今後多くの若手研究者が参加し、ベテランの先生方から多くの学びを得られる場であり続けて欲しいと思います。



大会の発表内容も、例年にも増して充実していたと思います。様々な分野で活発な議論がありましたが、ここでは、私が参加した文化心理学のセッションについて、報告させて頂きます。その中でも特に、2日目に行なわれた増田貴彦先生の招待講

演と、それに続く結城雅樹先生によるワークショップについて記述いたします。これらのセッションで最も印象に残っているのは、「新しい文化に向き合う際、文化心理学における従来の理論を当てはめることで説明した気になって、その文化が持つ本質的でユニークな『何か』が見えなくなっているのではないか」という議論です。ここからは、私の考えを述べさせて頂きます。Markus & Kitayama (1991)を契機として過去30年間に急速に発展してきた文化心理学では、重要な文化的次元がこれまでに複数提唱されてきました。個人主義一集団主義、文化的自己観、タイトネスルースネス、関係流動性などはその一例です。これらは複数の異なる文化を体系的かつ統合的に理解する上で非常に有用ですが、一方で、これまでに研究されてこなかった文化を解明する際には必ずしもベストなアプローチとは限りません。そもそも文化心理学は、何もないところから生まれた学問ではなく、リチャード・シュウェーダーなどの文化人類学者による数多のフィールド研究から得られた知見が土台となっています。現在の文化心理学では、多くの実証研究が積み上げられてきたが故に、かえってそれらの理論的枠組みに縛られてしまい、かつて黎明期の文化心理学者であるリチャード・ニスペットがアメリカ南部に「名誉の文化」を見い出したような、文化のユニークな側面を捉える試みが疎かになっている危険性があります。大規模な質問紙調査による国際比較が容易になった今だからこそ、一度文化心理学の原点に立ち戻り、真っ新な目で文化に向き合う姿勢を持つことが重要なのではないかと考えました。先述のシュウェーダーは、『Thinking through cultures』(Shweder, 1991, Harvard University Press)という本の中で、文化心理学の本質的なプロセスは「他者を通じて考えること (Thinking through others)」にあると述べています。「他者を通じて考える」とは、その文化における価値観や慣習などの意図世界 (intentional world) について現地の人からボトムアップに学び、その背後にあるロジックを内側の視点から体系的に解釈することである、とシュウェーダーは説明しています。これは、増田先生の「モンゴル研究では、(モンゴル出身の)自分の院生から学ぶことが多い」というお話にも繋がると思います。まずは真っ新な姿勢で文化と向き合い、そこから、その文化内で共有されている意図世界のロジックに合理的な解釈を見出していく“Thinking through others”的プロセスを通じて、既存の文化心理学の理論を更新していくことが重要だと思いました。

(おくやま ともたか・一橋大学)

## 院生リーグのご報告

菅沼 秀蔵・大坪 快

院生リーグは、有志の院生会員が学会大会の前日に開催する研究会です。私たちは幹事として運営に携わりました。本稿では、そのご報告と感想を記します。

昨年は台風の直撃により東京近辺の一部の方しか現地参加が叶いませんでしたが、今年は無事に対面での開催が実現しました。昨年に引き続き会場の確保にご尽力いただいた東洋大学の柿本さんをはじめとする多くの方々の協力のおかげで、今年も滞りなく実施することができました。また、社会心理学会の研究交流活性化支援制度を通じて金銭的なご支援を賜りました。関係者の皆さんに改めて感謝を申し上げます。

今年は参加者が116名、発表がのべ81件（口頭27件、ポスター39件、ライトニングトーク15件）を数える空前の規模となりました。ここまで多くの方々に参加していただいたことは、運営の一員として喜ばしい限りです。

一方で、院生リーグを内輪で楽しむだけの恒例イベントにしてはいけないという危機感も感じてきました。院生リーグの参加者は、卒業・入学等による入れ替わりを除けば、毎年大きくは変わりません。継続的に参加している人たちにとって、院生リーグはすでに見知った人たちとの懇親の場という側面が大きくなっているように思われます。研究生活を送るうえで必要なオアシスともいえますが、参加者同士があまりに親密であることは、せっかくの学術的な議論の場を居酒屋のテーブル席に変えてしまう危険と隣り合わせであります。

批評家のC・ウィルソンは著書『アウトサイダー』(“The Outsider”)において、既存の社会秩序(「インサイダー」)のなかに身を置くことを是とせず常に自己認識を問い合わせ続ける生のあり方を軸に、さまざまな思想や文学、芸術作品を論じました。ここでの「アウトサイダー」とは周囲から爪弾きにされた単なる敗北者ではなく、生の空虚さに苦しみ、ときに破滅を経験しながらも、真実を求める続ける人間像を指しています。理想的な研究者であれば多かれ少なかれこれに当てはまりそうですが、とりわけ学会の中心を占めるわけでもなく、学問的視座の面でも経済的な面でも安定していない多くの院生は、本質的に「アウトサイダー」な存在のように思われます。

コミュニティを形成することは、ある意味で「インサイダー」を生産することと表裏一体です。そうして得られる安らぎや憩いと引き換えに、無意識のうちに予定調和を求めて論争的な話題が避けられてしまったり、研究上の視野が狭くなったりする危険性に目を向ける必要があるでしょう。「アウトサイダー」たちがそのまままでいられるコミュニティを作るというのは半ば自己矛盾的ですが、院生リーグにはこうした困難なミッションを達成できる可能性があります。

今年は開催にあたり、社会心理学以外の異分野からも広く参加者を募りました。こうした取り組みの成果は部分的には現れています(例えば、理論生物学がご専門の方から教示行動が進化する条件を調べた研究の発表がありました)。しかし、「新たな風を吹かせる」には至らなかったというのが運営としての総括です。誰でも気軽に参加できる「敷居の低さ」を維持しつつも、熱意と野心で満ちた刺激的な空間をどう作っていくのか、今後しばらくは試行錯誤が続くかもしれません。今後とも暖かく見守っていただければ幸甚の極みです。



(すがぬま ひでぞう・東京大学・おおつぼ かい・東京大学)

\*\*\*\*\*

## 池上知子先生・池田謙一先生・浦光博先生が名誉会員に推戴

日本社会心理学会2025年度総会にて、池上知子先生・池田謙一先生・浦光博先生が名誉会員に推戴されました。日本社会心理学会に対するこれまでの多大なる貢献に心より感謝申し上げます。この度の推戴に対し、先生よりコメントを頂戴しております。以下に掲載いたします。

## 名誉会員に推戴されて

池上 知子

このたびは、名誉会員にご推戴いただき、誠にありがとうございます。私といたしましては、思いもよらないことでして、はたして、自分がこのような名誉にあずかるにふさわしい貢献をしてきたのか、はなはだ自信がなく非常に戸惑いを覚えたことも事実です。理事や常任理事を拝命したことはございましたが、その立場で何か際立った貢献をしたという記憶はなく、申し訳ない思いが増した次第です。ただ、並行して拝命した編集委員としてのお仕事や学会が設けられている様々な賞の選考委員としてのお仕事のことは印象に残っております。こちらのほうは、それなりに時間と労力を費やすことが多く、また採否について決断するにあたり大いに心を悩ませたものです。査読させていただいた論文が、晴れて掲載されているのを拝見したときは、何となく嬉しい気持ちになったものです。強いて言えば、これらが、私が学会の運営に多少なりとも貢献できたことかもしれません。なお、こうした経験は、私にとりましても、学ぶところが多々あり、とりわけ困難な研究に意欲的に取り組んでおられる方の存在を知ったことで、大いに触発されたこともございました。学会の運営にかかわることは、自分自身の成長にとっても得るところが大きいのだと改めて実感しているところです。



私が社会心理学会に入会しましたのは、博士後期課程を終えたのち大学に職を得て4年目くらいの頃だったと思います。けれども、当時の私は社会心理学との間にいくぶん距離を置いていたように思います。私が所属していた研究室は、認知心理学を専攻する方たちが主たる構成メンバーであり、院生のころは認知心理学の先端的な研究を日々見聞きする毎日を過ごしていました。もっとも、その頃の私は、自分が認知心理学を専攻するという自覚も特にありませんでした。要するに、心理学の学問体系をよく知らないまま、そして研究を行うということがどういうことかも十分理解しないまま、何となく大学院に進学したどちらかというと意識の低い学生であったかと思います。修士論文は対人認知に関するテーマで取り組みましたが、その研究がどのような位置づけになるのかも判然としていませんでした。周囲からは認知心理学の研究室にいながら、なぜそのような研究テーマを選ぶのかとよくいぶかられたものです。ただ、当時の指導教授は、分野の専門性や境界にあまりこだわらず、扱う現象が面白ければ自由に研究させて下さるところがあり、その寛大さに救われていたように思います。

博士後期課程に進学したころ、社会心理学のなかで、対人認知や社会的推論、態度を扱う研究において認知心理学の理論やパラダイムを積極的に取り入れて人間の社会的行動の基盤となる認知機構を精密に検討することを目指す「社会的認知」という分野が登場したことを知り、この分野なら自分も何かできるのではないかと、そこに自身の専門性を求めるようになりました。そして、対人認知における個人内の心理機制に焦点を当てた研究に専念するようになりました。しかし、こうした研究が、社会心理学の掲げる学術的課題（個人と社会のダイナミックな関係の探求）にどのように資するのか、確信がもてず煩悶することになります。幸い、問題関心を共有する大変優秀なお仲間と巡り合うことができ、この分野の意義について論考した書籍「社会的認知の心理学－社会を描く心の働き」（ナカニシヤ出版 2001年）を共著書として刊行する機会を得、これが大いに励みになったことは確かです。その後も、愚直に研究を続けるなかで、社会的アイデンティティ理論、そしてシステム正当化理論と出会い、それらを自身の研究に取り込むことで、個人内過程と社会のマクロ構造の間にみられる相互連関の構図を切り取るような研究ができればと思い至るようになりました。その一端を記した小著「格差と序列の心理学－平等主義のパラドクス」（ミネルヴァ書房 2012年）に対して本学会から「出版賞」をいただいたときは、ようやく自分が社会心理学会に受け入れられたように感じ大変嬉しく思ったことを覚えてています。

ところで、私は学部や大学院時代に社会心理学全体をきちんと学んでおりませんでした。ただ、そのような不勉強な自分に

社会心理学のテキストの執筆を進めてくださる方がいて、これを機に一度社会心理学を一から勉強しなおそうかと思い立ち、遠藤由美先生（関西大学名誉教授）の助力を得て、「グラフィック社会心理学」（サイエンス社 1998年）を刊行させていただきました。幸いにも多くの読者にご活用いただき 2024年に第3版を刊行する運びとなりました。

以上のような経余曲折を経て、ようやく社会心理学の一学徒としてのアイデンティティを得たように思います。このたびの名誉会員への推戴により、この分野で研鑽を積んできてよかったとあらためて感謝しているところです。ありがとうございました。

（いけがみ ともこ・甲南大学）

## 名誉会員に推戴していただいて

池田 謙一

本年9月20日、社会心理学会の第66回大会総会にて名誉会員に推戴いただき、まことにありがとうございました。たいへんに栄誉に思いますとともに、推戴に関わられた方々に厚く御礼申し上げます。

振り返れば、30年前のことです。当時、本学会の編集委員と理事を兼務している状態で、さらにご指名により学会事務局担当の常任理事の役を引き受けました。その任期中に「編集長による投稿受理論文校正時八編書き換え事件」が発生しました（1996年初）。総会のスピーチで言及しましたので、ここでは再度申し上げませんが（会報137号に当時の経緯が記載されています）、『社会心理学研究』を訂正・再発行せざるを得なくなったこの事件が、ぼくにとって学会運営に強くコミットする導線となりました。翌年には、この事件の反省から発する学会改革「2007年委員会」の運営にも携わり（昨年の村田光二先生の記載にあります）、現在の社会心理学会の原型の形成に及ぼすながら関わることとなりました。こうした経緯から20年ほどの間、常任理事として仕えさせていただきました。

ただ省みれば、この20年間は編集委員長役含め各役割の司々（つかさつかさ）での対応に終始していただけで、見るべき貢献もなかったかな、という個人的な実感もあります。言い訳めますが、改革の駒を進めたという達成感の後にもずっと関わっていると、すり減りますし時間も奪い過ぎました（事務局など、そのときどきを支えていただいた安野智子さん、柴内康文さん、片桐恵子さん、繁樹江里さんには感謝の至りです）。そんな視点から学会の将来の望ましい運営を考えるならば、年々できるだけ多くの会員の先生方に役割を受けまわっていただき、（すり減らないうちに）学会の運営を実感しながら、学会の持つ会員相互の研究研鑽のサポート力を高めていただけたら、と思います。そのことでもちろん、研究者としてのプラス面も多々あります。個人的な経験では研究領域も異なる諸先生方との間に自分のネットワークが広がったことはその最たる経験で、いまもありがとうございます。

さて「名誉会員」という名称には少々不都合な語感があります。古希をもって全ての仕事は終わり、学会大会にはお気楽に参加させていただく、というようなニュアンスです。名誉会員「推戴」の際、「衰退」しているから名誉会員か、とジョークを飛ばされた過去のスピーチもありました。そこに含まれるニュアンスはやや気がかりです。日本の多くの大学では、遅くとも古希をもってこれで退職、教育どころか研究のサポートも激減するというところが一般的です。学会もそれに照応するように「全てお疲れさま」モードでよいのでしょうか。



写真：同時期に大学院生時代を過ごした教え子たちと

この段階だからこそ、研究のサポートの機会を一層設けていただくことは可能ではないでしょうか。もちろん、若手の支援が重要なことは重々承知ながら、米加豪では80歳を過ぎても継続的に研究活動に活発に勤しむ仲間がいます。こうしたことはよくご存じの会員も多いかと思います。しばしば話題に上る「日本の研究力の衰退」には、まだ発展し続けている研究者の足元を奪うという面もあるのではないかと、疑っております。

ということで、当方、所属先でも教育こそ終わりを告げますが、ある研究センターに所属する研究員として、科研等に拠りながら研究そのものは継続させていただきます。自分の祖父は60代で亡くなり、父の70代は明らかに余生でしたが、この60年の間に医療も人々の身体的な頑健さも大きく変化したことを踏まえれば、研究者として活動できる時間がさらに10年あってもおかしくありません。それを達成するため、今年度は科研によってオリジナルの十数カ国の国際比較調査を進行させていまし、スマートニュース メディア研究所の研究会共同座長として関わる「スマートニュース・メディア価値観全国調査」は一年おきに十年に渡って計画されていますが、今年はまだその二回目をまとめている段階という途上感を持っております。また今年の秋には幸福感研究に政治心理学の視点から「新規参入」いたしました(オープンアクセスにしてあります:<https://doi.org/10.1007/s11482-025-10509-y>)。これら研究のリンクとなる「統治の不安(anxiety over governance)」という新概念の追究にまだ終わりはありません。ちなみに葛飾北斎の『富嶽三十六景』は72歳、『富嶽百景』は70代後半の作でした。これをを目指して邁進します。みなさんにお会いする折には、互いの研究の進展について語り合いたいものです。

(いけだ けんいち・同志社大学)

## 名誉会員に推戴していただいて

浦 光博

このたびは、名誉会員への推戴をいただき、誠にありがとうございます。名誉会員証には私に対する感謝の意を表する旨が書かれていますが、むしろ私が学会に対して感謝しなければならないと思っています。

これまで他のところで同じようなことを書いたり話したりしてきてますが、まぐれで合格した大学で大した目的もなく遊んでばかりいたアホ学生だった私ですが、3回生前期に受講した「グループ・ダイナミックス」の授業（恩師の廣田君美先生（故人）の担当）で学術の世界に覚醒しました。この出会いがなければ、私は研究者の道に進むことは決してなかっただと思います。そして3回生後期に出会ったのが「社会心理学実験実習」の授業です（先輩名誉会員でいらっしゃる高木修先生が主担当）。総会の折の挨拶でもお話ししましたが、この授業の面白いことと言ったら！学生がチームを組んで自ら先行研究を調べ、仮説を立て、実験計画を練ってデータをとり、分析から結果、考察まで一連の実習を行う。この一連の過程で味わった高揚感は、当時のことを思い浮かべるたびに心と体によみがえってきます。どんな仮説を立て、どんな実験をどこで行い、どんな結果が出て、それをどう考察し、どんな図を書いたかまで、今でも詳細に思い出すことができるほどです。このとき研究への嗜癖が生じたのだと思います。それがなければここまで長く研究を続けることはなかっただろう。

そんな私が社会心理学会に出会ったのは、廣田先生が大会委員長をつとめられた1978年の第19回大会でした。まだ私は学部の学生でしたが、先輩の故西川正之さんにあれこれご指導を受けながら開催のお手伝いをさせていただきました。その後大学院に進学し、会員として大会に参加するようになり、多くの仲間と知り合うことができました。大学に職を得てからは、研究活動だけでなく学会の運営・改革にも関わりました。昨年の会報で村田光二さんが書かれていますが、2007年委員会での仕事はその1つです。この委員会ができたのは1997年で、私はまだ41歳でした。



現在では41歳で学会の運営や改革に携わることは別に珍しいことではないと思います。しかし、当時、41歳の若造が学会の改革案の作成に関わるなどということは、とんでもないこと……、だったのかもしれないですが、生意気というかよく世の中のことが分かっていなかっただけなのか、何のためらいも抵抗感もなく、同世代の村田さんや池田謙一さんとともに言いたい放題で楽しく仕事をしました。この改革案が現在の学会運営にどう影響しているかについては、昨年の会報に村田さんが書かれているとおりです。

理事や常任理事としての仕事としては、1995年度から2025年度までの間に理事を6期12年、常任理事（編集委員長）を1期2年、会長を一期2年、それぞれ努めさせていただきました。また、会長であった2018年には、勤め先の追手門学院大学で年次大会を開催しました。これらのどれも、やりたいことだけをやり、やりたくないことはしない。楽しくなければ、どうすれば楽しめるかを考える。それでも見つからなければ、結局やらない。というように、自由にわがままに過ごしました。まあそんな私でも名誉会員にしていただけるのだから、この学会の懐の深さは相当なものだと思います。最初に書いたように感謝すべきは私の方です。あらためて、心からの御礼を申し上げたいと思います。

来年3月には勤め先で定年を迎えます。でもまだ嗜癖は収まる気配はなく、いやむしろますますひどくなっているようにも思えます。今後もいろいろな場所でみなさまとお目にかかることが多かろうと思います。変わらぬご交誼をいただきますようお願ひいたします。

（うら みつひろ・追手門学院大学）

\*\*\*\*\*

## 第27回(2025年度)日本社会心理学会賞選考結果のお知らせ

本年度の日本社会心理学会賞は、優秀論文賞1編、奨励論文賞2編、出版賞1編が選出され、第66回大会総会で発表されました。ここでは、各賞の受賞論文・受賞書籍とその理由を紹介するとともに、受賞者のコメントを掲載いたします。受賞された先生方、誠におめでとうございました。

### 優秀論文賞

鈴木 啓太・村本 由紀子

「能力の可変性に関する暗黙理論の影響を規定する境界条件の検討:課題選択とその自由度に着目して」(40巻第3号)

本論文は、人々が持つ暗黙理論の中でも、増加理論の効果を強調してきた従来の主流的見解に対し、その効果の限定性や一貫性の欠如が近年指摘されていることを踏まえ、環境側の境界条件を理論的に提案したものである。これまで十分に検討されてこなかった実体理論が適応的に機能する条件に着目し、課題選択の有無や自由度といった社会生態学的要因を導入することで、増加理論を課題熟達方略、実体理論を適性探索方略として位置づける新たな枠組みを提示している。その理論的裏付けを、実験的な手法にとどまらず、学校現場のデータなど多様なフィールドでの検証へと広く展開している。欧米の主流研究とは異なる日本的文脈や社会生態学的視点を取り入れることで、社会心理学における文脈依存性の重要性を示し、学問の発展と社会的意義の両面で高く評価できる。また、指標の精緻化や文化横断的な追試など今後の課題も明確に示されており、理論と実践を橋渡しする先導的な業績として、優秀論文賞にふさわしいものと判断された。

### 奨励論文賞

日下部 春野・前田 友吾・結城 雅樹

「拒否回避傾向の文化差はどこからくるのか:関係流動性と評判期待の役割」(40巻第1号)

本論文は、日本とアメリカの成人を対象に行われた三つのオンライン調査のデータを用い、関係流動性が拒否回避傾向に与える影響を明らかにした研究である。従来の文化心理学理論では説明しきれなかった東アジアと北米の文化差について、制度アプローチの観点から、関係流動性の低さがネガティブな評判を避けるという適応課題を生み、それが拒否回避傾向の強さにつながるという仮説を、明瞭かつ堅実な方法で検証している。序論では先行理論の課題を丁寧に整理し、研究の意義や目的が明確に示されている。結果は再現性と拡張性の両面から検証されており、今後の後続研究への指針となる内容である。また、日本発の社会生態学的視点から国際的に発信力のある知見を提供している点も高く評価できる。以上の理由から、本研究は明確な結果と方法論の規範性、将来性を兼ね備えた優れた論文であり、奨励論文賞にふさわしいと判断された。

## 奨励論文賞

宮崎 弦太

### 「配偶者の応答性知覚に応じた共同的動機と交換的動機の調整:夫婦関係の良好さと主観的幸福感との関連」(40巻第3号)

本論文は、配偶者の応答性知覚の日々の変動に即して、家事における共同的動機と交換的動機が調整される可能性を検証したものである。夫婦ペアを対象として8日間にわたる日記法と事後追跡という調査設計の下、リッチなデータを取得し、APIMを用いたマルチレベル SEMにより、関係ならびに個人のウェルビーイングとの関連を精緻に検証した、方法論的にチャレンジングな研究である。応答性知覚から交換的動機への負の傾きが強いほど関係満足度が高いという知見は、交換規範が状況依存的に適応的機能を果たし得ることを示し、動機づけ研究の焦点を静的な関連から動的なものへと拡張させるものである。将来性に富み、分野の発展に資する成果として、奨励論文賞にふさわしいと判断された。

## 出版賞

坂田 桐子(著)

### 「女性リーダーはなぜ少ないのか?: リーダーシップとジェンダー」 ちとせプレス

本書は、リーダーシップとジェンダーをめぐる課題を、社会心理学の立場から、実証データに基づき体系的に整理した優れた著作である。政府統計や著者自身による豊富な実証データを用いて、女性リーダーの少なさを社会構造的要因や文化的背景と関連づけて論じると同時に、実証的にはリーダーシップの有効性に男女差が認められないことを明確に示している。その上で、男性が作動性・道具性から、女性が共同性・表出性から判断されるというジェンダーステレオタイプに基づくバイアスがリーダーシップの捉え方においても生じ、一面的な側面のみが強調される傾向にあることを指摘した点は特に重要である。著者は、性別にかかわらず作動性と共同性の双方の観点からリーダーシップを理解すべきであると提案しており、この知見は固定的な性別役割観を超えて、多様な人材が資質を発揮できる組織環境の実現に資するものである。

選考においては、理論的整理と具体的提言の両立に成功している点が高く評価された。本書が多様な観点から社会心理学の今後の発展に対し貢献すると判断し、日本社会心理学会出版賞に推薦するものである。

## 選考委員

委員長 相馬敏彦

理事 大高瑞郁・大坪庸介・小林知博・竹橋洋毅・西村太志・三船恒裕

会員 秋保亮太・石井宏典・繁柳江里・沼崎誠

(五十音順)

## 受賞コメント

### 受賞のことば

鈴木 啓太

このたびは、優秀論文賞という身に余る栄誉を賜り、誠に光栄に存じます。まずは、本論文の査読および出版、ならびに論文賞の選考に携わってくださった先生方に、心より御礼申し上げます。

本論文は能力の可変性に関する信念である暗黙理論の影響を左右する境界条件を、課題選択の自由度という観点から検討したものです。従来の暗黙理論研究は、学校における算数のテストなど、学習者が（主に指導者に）与えられる特定の課題に取り組むような場面に焦点を当て、困難に直面した時にも「能力は努力で変わる」という信念を持つことで、モチベーションを維持できることを示していました。一方で、社会には自ら取り組む課題を選ぶ場面は遍在しており、そういった場面では、「能力は生まれつき決まっている」という考え方から、困難を努力で克服するだけではなく。自分の適性を最も活かせる課題を選択することもまた有用です。本論文は、近年の暗黙理論研究をレビューし、課題を自由に選択できる程度によって暗黙理論と種々の変数の関連が調整されることを議論したモノグラフになります。

この論文は、教育心理学で発展してきた暗黙理論研究に、状況や環境の影響力に焦点を当てる社会心理学の観点を援用する構造をとっています。さらには教育社会学の知見にも立脚しており、やや節操がない論文になったという自負があります。ただ、この論文に価値があるとしたら、それはその節操のなさゆえに提示できた独自の観点にあると思います。また、節操がない論文を書くのはとても楽しく、博論をベースにしているものの、査読対応含めてどのように加筆していくかという共著者との議論はとても充実した時間でした。そうした過程があったので掲載に至っただけでも大きな喜びでしたが、受賞をきっかけに本論文がより多くの人の目に触れ、後続の研究の発展につながることがあれば望外の喜びです。同時に、ストーリーの核となっている実証研究は質・量ともにまだまだ発展途上であり、今後とも精進して研究を進める所存です。

改めて、本研究に関わっていただいた方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

（すずき けいた・東京大学）

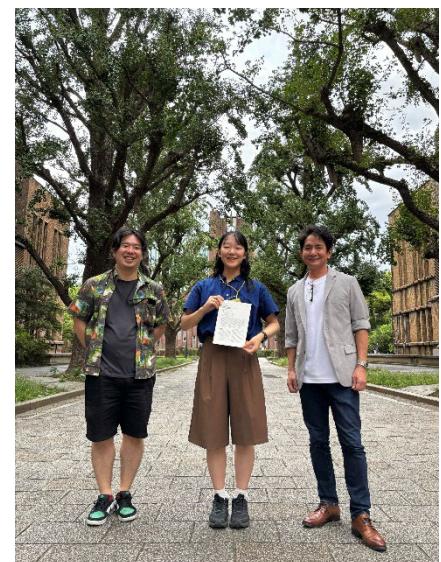
### 奨励論文賞受賞の言葉

日下部 春野

このたびは、このような栄誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。本論文は、私が社会心理学の分野に飛び込んで初めて執筆した論文です。それがこのような形で評価され、よりいっそう記念すべき一編となりました。本論文の出版、査読、および論文賞の審査に関わってくださったすべての先生方に、心よりお礼を申し上げます。

今回、論文執筆という営みを通して、私は文字通りいろいろなことを学びました。研究の組み立て方や説得的な提示のしかたといった研究の基礎はもちろんですが、最も印象的だったのは、一本の論文が完成するまでには、想像以上にたくさん的人が関わり、支えがあるという事実です。

これまで私は、研究論文の著者というものは、その論文が扱うトピックについてすべてを知る完璧な存在だと思っていました。しかし、実際に自分で論文を書いてみればも



もちろんそんなことはなく、執筆していく中でも何度も試行錯誤を重ねながら、そして想像以上に多くの人の力を借りながら、ようやく形になるものであることを知りました。まず、共著者の前田友吾先生と結城雅樹先生はもちろん、本研究の直接的な先行研究の著者である橋本博文先生と山岸俊男先生がいなくては、この研究は存在し得ませんでした。「巨人の肩に立つ」とは、まさにこのことです。

さらに、ゼミや学会では、たくさんの研究者の方々から示唆に富んだコメントをいただきました。いただいた一つ一つのコメントが、本論文の核心から細部にいたるまで、あらゆる部分の改善につながっています。そして、査読や出版直前のやり取りを経験する中で、論文が世に出るまでには、見えないところで多くの人が携わっていることを実感しました。このように、一つの研究が始まってから論文が出版されるまでのすべての道のりに思いを馳せてみれば、研究とは、過去から未来に生きる世界中のあらゆる人間が関わる営みであることがわかり、感慨深いです。研究ってすごいですね。私たちの論文の先にもまた新たな研究が続き、そして自分も微力ながら「巨人」の一部になれたら嬉しいです。改めて、本研究に関わってくださったすべての皆さん、ありがとうございました。

最後に、研究を始めて以来、自分たちの研究を他の人に「面白いね！」と言ってもらえる喜びも知りました。本論文で扱った、文化・社会環境と人間心理・行動の相互影響関係は、ますます面白いことばかりです。気になること、検証してみたいこと、実践してみたい研究手法、つけたい知識は尽きません。今後も面白い研究を重ねていけるよう、精進してまいります。引き続きご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願ひいたします。

(くさかべ はるの・北海道大学)

## 奨励論文賞をいただいて

宮崎 弦太

この度は、日本社会心理学会奨励論文賞をいただき、大変光栄に存じます。論文を査読していただいた先生、また、論文賞の審査をしていただいた先生に、心よりお礼申し上げます。

本研究は、夫婦関係における家事を恩恵提供行動と捉え、その動機が夫婦関係の良好さおよび主観的幸福感とどのように関連するかを検討したものです。本研究の特徴は、夫婦関係の状況に応じて2つの動機（共同的動機と交換的動機）を調整することが、家事を安心して継続的に行うために重要であるという視点を導入したところにあります。具体的には、夫婦ペアを対象にした日誌法調査によって、毎日の配偶者からの応答性知覚と家事における2つの動機を測定して、参加者ごとに両者の傾きを推定しました。そして、配偶者の応答性知覚の毎日の変動に応じて2つの動機の強さがどのように変化しているか（配偶者の応答性知覚から各動機への傾き）と、事後調査で測定した関係の良好さや幸福感との関連を検討しました。



結果として、傾きの効果が認められたのは一部でしたが、配偶者の応答性を低く知覚している日ほど家事における交換的動機が強かった人（配偶者の応答性知覚から交換的動機への負の傾きが強かった人）ほど、本人が評価する夫婦関係の満足度が高いことが示されました。これまでの研究では、衡平性の原理に基づく交換的動機は親密関係に悪影響をもたらすと考えられてきましたが、配偶者の応答性知覚に応じて調整された交換的動機が夫婦関係の良好さと結びつく場合があることを示したことが、本研究の貢献と考えております。

本研究のアイデアは、大阪市立大学（現 大阪公立大学）で博士論文の終章を書いているときに生まれました。もう十数年も前になります。研究実施にかかるコストが非常に大きく、なかなか実現できませんでした（科研費に応募していましたが、何

度も落ち、〇度目の正直で採択されました)。そのような中、前任校の任期の最後の年(2020年のコロナ禍のときでした)に、これまでの集大成として、思い切って実施したのが本研究です。正直なところ、この研究で最後になってもよいと思っていました。ご縁があって、その後も研究を続けていますが、自分にとって最後になるかもしれないと思っていた研究で、これからも頑張れと賞がいただけたことに、身が引き締まる思いです。社会心理学の親密関係研究の発展に少しでも貢献できるように、これからも精進いたします。

最後になりましたが、大学院時代の指導教員である池上知子先生をはじめ、私が研究を続ける中で関わっていただいた方々、そして、苦しいときに私を(共同的動機によって、ときには交換的動機によって)支えてくれた妻と子どもたちに心より感謝をいたします。

(みやざき げんた・学習院大学)

## 出版賞を受賞して

坂田 桐子

この度は、拙著『女性リーダーはなぜ少ないのか? : リーダーシップとジェンダー』(ちとせプレス、2024年)に対して思いがけず栄誉ある賞をいただき、非常に光栄に存じます。審査していただきました先生方、そして企画からご支援いただきましたちとせプレス様には、心より御礼申し上げます。

「リーダーシップとジェンダー」は、博士論文以来、長く関心を持ち続けてきたテーマです。近年、このテーマへの社会的関心が高まっていることを肌で感じる一方で、「女性リーダーはなぜ少ないのか」という問い合わせに関する有益な知見が、社会心理学や産業・組織心理学の分野で豊富に蓄積されているにもかかわらず、日本社会ではそれらが十分に認識されていないのではないかと考えていました。そのため、本書では、社会心理学や産業・組織心理学分野の最新の研究知見や各種統計・調査資料を踏まえながら、「(特に日本では)なぜ女性リーダーや女性管理職が少ないのか、女性がリーダーシップを発揮できる組織や社会にするにはどのような対策や取組が必要なのか」という問い合わせに対し、可能な限り答えようと試みました。この問い合わせに対するある程度の回答は提示できたと考える一方で、今後実証的に解明されるべき多くの課題も明らかになりました。自分としても掘り下げきれなかった部分がありましたので、この度の受賞は全く予想しておらず、嬉しい驚きとなりました。



博士論文を著書として出版したことはあったものの、実は、このような形で単著を出版するのは初めての経験でした。この著書の企画をちとせプレス様からいただいた時、引き受けるか否か、単著にするか共著にするかについてさんざん悩み、結局は「単著で執筆する」道を選びました。しかし、執筆開始から出版まで3年かかり、その間、ワークライフバランスを犠牲にして苦しんだこともあります。改めて、短期間に何冊も単著や共著を世に送り出される先生方を心から尊敬する次第です。

私の研究者人生があとどれほど続くかわかりませんが、続けられる限り、今後もこのテーマに取り組み続けようと思います。最後になりましたが、この度は誠にありがとうございました。

(さかた きりこ・広島大学)

\*\*\*\*\*

## 「社会心理学研究」掲載論文への CC ライセンス付与についての説明

### 編集委員会

本誌は、J-STAGE を通じて自由に読むことのできるフリーアクセス誌です。ネット環境さえあれば誰でも読めるという点で、読者に対してオープンな雑誌であったといえます。しかし、①投稿費用（会員は無料）などの情報が投稿規程には明示されておらず、潜在的な投稿者には必ずしもオープンとはいませんでした。また、②掲載されている論文をどの範囲でなら利用してよいのか、という二次利用のルールについても明示しておらず、論文の利用者にとってもオープンではありませんでした。

これらの課題を解決するために、2025年10月1日に投稿規程を改定いたしました。①への対応として、潜在的な投稿者にとって必要な情報を投稿規程に明示するようにいたしました。また、②への対応として、規程改定以降に投稿され、採択された論文は全てクリエイティブ・コモンズ（CC）ライセンスを付与することにいたしました。これらの手続きにより、本誌はダイヤモンド・オープンアクセス誌（ライセンス情報付きで論文を無料公開し、かつ掲載にあたって著者負担がないもの）の仲間入りを果たすこととなりました。投稿規程の詳細は以下をご確認ください。

### 日本社会心理学会投稿規程

CC ライセンスの付与は、今後の全ての著者の方に関わる変更ですので、説明しておきたいと思います。2025年10月1日以降に本誌に投稿し、採択された論文の著者には、以下のいずれかの CC ライセンスを選択していただくことになります。それぞれのライセンスの特徴について簡単に説明していきます。なお、いずれのライセンスを選択したとしても、利用者には出所（論文情報）の明示が義務づけられます（CC ライセンスは著作権を保持したまま二次利用のルールを明示するものです）。

図 社会心理学研究において選択できる CC ライセンス



出典：[Creative Commons](https://creativecommons.org/licenses/)

図左にある CC-BY（表示）を選択すると、当該論文は著者の許諾なしに営利・非営利を問わず二次利用が認められることになり、改変利用も認められることになります。一言でいえば、論文が広く利用されやすくなります。CC-BY は CC ライセンスの中でもっともオープンな形態をとるもので、最もオープンな形態をとるものです。

一方、図右の CC-BY-NC-ND（表示-非営利-改変禁止）を選択すると、当該論文は非営利目的であり、かつ改変しない場合にだけ二次利用が認められることになります。CC-BY-NC-ND は、利用先を限定するものであり、CC ライセンスの中でもっとも保守的な形態をとります。なお、CC-BY-NC-ND のついた論文でも、これまで通り、学会への転載許諾申請を行っていたとき、学会から認められれば営利目的での利用が可能です。この点で、CC-BY-NC-ND は、従来に近い形での二次利用を認めるものだといえます（完全に同じではありません）。

ご自身の論文が広く利用されることを期待される方は CC-BY を、許可なく営利目的での利用や改変利用される点に懸念をおもちの方は CC-BY-NC-ND を選ぶとよいでしょう。ただし、一度選択した CC ライセンスを後から変更することはできませんので、ご注意ください。より詳しくお知りになりたい方は、以下のサイトをご参照ください。

### クリエイティブ・コモンズ・ジャパン

ご覧いただくとわかるように、本来 CC ライセンスは 6 種類あります。本誌は、その中の二つの CC ライセンスから、掲載

決定後、著者の方に選んでいただくようにしています。雑誌によっては学会の方向性や方針、編集手続きの事情などにより、特定のCCライセンスしか付与されないものもあります。しかし、本誌の潜在的な著者である会員の方には、オープンな志向性をもつ方もいれば保守的な志向性をもつ方もいると想定できるため、いずれのニーズにも対応できるよう、この二つからの選択していただけるようにしています。ダイヤモンド・オープンアクセス誌となった本誌へのご投稿をお待ちしています！

(そうま としひこ・広島大学・編集担当常任理事)

## 日本社会心理学会 2025年度春の方法論セミナー 開催について（速報）

以下の内容で春の方法論セミナーを準備しています。当日は多数の方の参加をお待ちしております。

タイトル 『生成AI時代の教育と研究－活用の基本と応用 どう活かす・どう付き合う－』

日 に ち 3月3日(火)

時 間 13:30 -

開催形式 オンライン

### 講師

北陸先端科学技術大学院大学 新保直樹 先生

『研究活動を支援するツールとしての生成AI入門』

北陸先端科学技術大学院大学 中分遙 先生

『生成AIの教育・研究活動で気をつけていること：暫定的な指針について』

名古屋大学 高野了太 先生

『生成AIを用いた心理学研究：生み出す・まとめる・組み込む』

大阪大学 三浦麻子 先生

『生成AI時代の心理尺度翻訳をめぐるビッグチームプロジェクト』

## 『社会心理学研究』掲載（予定）論文

第41巻第3号（2026年3月刊行予定）※順次早期公開（12月以降予定）

### 【原著論文】

KIM Nahyun・片桐恵子 高齢期におけるオンライン上の付き合いの二面性——帰属感が孤独感に与える効果——

### 【資料論文】

久保昂大・池田浩 地域スポーツでのボランティア活動に対する親の継続意図と感謝の受領との関係の検証

## 編集後記

第66回大会の熱気が鮮やかに蘇る会報となりました。制限のない対面で旧交を温め、新たな研究成果について語り合えることは、学会本来の醍醐味であると改めて実感いたしました。また、名誉会員の先生方による示唆に富むご講話や将来への展望、そして受賞者の皆様の喜びあふれるコメントを拝読し、研究への情熱が一段と喚起されました。心よりお祝い申し上げますとともに、会員の皆様のさらなるご活躍を祈念いたします。

(内田由紀子・広報担当常任理事)

学会大会の、あの雰囲気がとても好きです。研究に邁進する人たちが目を輝かせて成果を語り、聴衆もまたワクワクしながら耳を傾ける。今年の社会心理学会でも、そうした空気や熱量に十分に満たされました。本会報を通して、その余熱をあらためて感じています。年に一度の貴重な場を支えてくださるすべての方々に、感謝の言葉もありません。（橋本博文・広報委員）